

持続可能な社会を創る資質・能力を培う一実践

～全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの工夫・改善を通して～

小林 伸彦・滝本 穰治

【要約】

平成 29 年度「しあわせ社会の実現～決めること～」の次なるステップとして、実践力や行動力を重視した「しあわせ社会の実現～働きかけること～」の実践を行った。多様な価値観を有する他者との対話を通して「しあわせ社会」とはどのような社会か、哲学的に考えることから始めた。理想とする「しあわせ社会」と現実社会とのギャップや課題を調査し、解決に向けて主体的な態度で社会に参画・貢献していく学習プロセスを経て、生徒は持続可能なよりよい社会づくりに向けた活動を進めた。そのような中で、生徒は自分の在り方や生き方について考えを深めるなど、内省(自己探究・自己更新)しながら学びを深めている様子が分析対象生徒の記述から見取ることができた。

【キーワード】 持続可能な社会, 「しあわせ社会」, 社会への参画・貢献, 内省(自己探究・自己更新), 課題解決型学習プログラム

1 主題設定の理由

(1) 昨今の研究より

これからの社会¹を創る生徒を育成するには、どのような学びを構想し、実際に施していけばよいのだろうか。一つの重要なキーワードは、持続可能な社会と考えた。

ユネスコは、地域で活動することを通して世界規模の問題が国内的・地域的な側面を有しながら表面化していることを見抜いていく学びの有効性を述べている。国内はもちろん、世界において生じている社会問題は、決して離れた空間で起きている問題ではないと考える。地球上で生じている社会問題は、空間的な差異が影響することもあるだろうが生徒の身近な身の回りの実社会でも生じている可能性が高く、生徒が未来の社会に向けて自分自身の在り方や生き方を考える上で取り扱った方がよいことである。

これからの未来に求められる人間形成について、多田は「世界(社会)がつながり、関連性をもって成り立っていることを認識し、さまざまな民族・生物が共存・共生する社会において、多様な文化・価値観などの差異を調整・調和し、また活用し、相手の立場や心情に共感し、イメージでき、利害の対立等の困難さをなんとか克服し、その過程で自己成長・変革しつつ、持続可能な地球社会を構築し、発展させる資質・能力、技能をもった主体的行動力をもつ人間」²と述べている。

同様に、奈須も「個々の内容について子供の世界との緊密な関連付けを図り、現実世界で展開されている本物の社会的実践という文脈や状況の中で主体的・対話的に深く学ぶことにより、学びは生きて働くものとなる。」³と述べ、現実世界と学びとを関連付けていくことの重要性を示している。また、

¹ 本校における平成 30 年度の研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」において「複数の人と構成する空間の総称」と定義した。

² 多田孝志「グローバル時代の対話型授業の研究—実践のための 12 の要件—」p. 46, 東信堂, 2017 年

³ 奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」p. 207, 東洋館, 2017 年

市川は「人間力とは、“社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力”と定義され、職業生活、市民生活、文化生活といった社会生活を営むのに発揮されるものである。」⁴とし、これからの社会を創る資質・能力を育むためには、自立した人間として学びの中で身に付けた力を発揮し、社会に参画・貢献⁵していけるようにすることが求められていることを述べている。

以上より、後世にとっても幸福感が味わえる社会づくりに向けて多様な視点から人間形成の要件を検討し、その資質・能力を育むことができるようにしたいと考えた。生徒と生徒の身の回りの社会を接続させる工夫をしながら往還的な学びを設定するとともに、その学びを通して生徒が自分自身の在り方や生き方について内省(自己探究・自己更新)⁶していくことが重要と捉えて、本研究主題を設定した。

(2) 生徒の実態より

本校生徒は基礎的な知識及び技能の習得状況は非常に良好で、様々な習い事に率先して取り組むなど、何事においても関心が高い。しかし、生活に関わることは周囲の大人が先回りして用意し、生徒が困らないように手助けしている現状が見られ、計画性をもって学校生活に臨んでいる生徒は減少していることが懸念される。

本校生徒の傾向として、課題関与意欲や他律的意欲、自己向上意欲が高いこと、学習効力感や社会的効力感が低く、自立体験が乏しいことを挙げた。

また、昨年度までの総合的な学習の時間(グローバル市民科⁷)における生徒の学びでは、各学年の講座や全校講座「しあわせ社会の実現～決めること～」の中で、各教科において身に付けた知識や技能を生かして発表したり、話し合い活動で活発な意見交換や新たな意見の創出をしたりすることができていた。しかし、インタビューなどにおいて社会とのつながりを創出する活動では、対象が家族や塾講師など限られた人材に偏るなど、学校外へ学びを求めていけない姿勢がどの学年の生徒にもあることが見て取れた。

この実態を踏まえ、数値による評価を行わない総合的な学習の時間(グローバル市民科)において、生徒がもつ学習意欲や学習効力感を伸ばしつつ、学んだことが地域や社会とつながったり、自分が社会に関わったという体験を伴った学びを獲得したりすることは、生徒の自己肯定感を高め、自分の「よさ」や「らしさ」を生かすことになり、生徒にとってより価値の高い学びとなり得ると考える。

各教科等で身に付けたことを活用しつつさらに発展させたり、横断的・総合的な学習や探究的な学習によって学びを深めたり、新たな価値ある考えを創り出したりしていく経験を積み重ねたりしていくことが、総合的な学習の時間においては重要である。本校の総合的な学習の時間(グローバル市民科)において、全校生徒・全教職員で取り組む「しあわせ社会の実現～働きかけること～」の中で、どのような学びを創出させ、支援していくことで持続可能な社会を創る資質・能力が育まれるかを探究したいと考え、本研究主題を設定した。

⁴ 同書3, p. 47

⁵ 本校における平成30年度の研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」において、「どのような社会であろうと、その空間を互恵的でよりよいものにするために考えを述べたり、行動したりしていくこと」と定義した。

⁶ 本校における平成30年度の研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」において、多様な他者と共に生きていく中で「自分について探究し、更新していくこと」と定義した。

⁷ 本校における総合的な学習の時間の呼称である。

2 研究のねらい

全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの開発を通して、持続可能な社会を創る資質・能力を培う。

3 研究の仮説

全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの開発を行えば、持続可能な社会を創る資質・能力を培うことができるだろう。

4 研究の手立て

持続可能な社会を創る資質・能力を培うために、全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間(グローバル市民科)「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムを開発する。

5 基本的な考え方

(1) 「持続可能な社会を創る資質・能力」とは

「持続可能な社会」とは、「持続可能な開発(Sustainable Development : 以下「SD」)」によって形成される社会のことであり、UNESCO が「持続可能な社会づくりのための教育(Education for Sustainable Development : 以下「ESD」)」を提唱したことが起源である。「持続可能な開発(あるいは発展)のための教育」または、「持続可能な社会形成(のための教育)」とも呼ばれ、地球温暖化などの環境問題が取り沙汰される近年において、学校現場において推進が求められているものである。

UNESCO は、持続可能な社会の担い手を培う教育には、次の二つの観点が必要だとしており、これは、

環境教育、国際理解教育などにとどまらず、環境、経済、社会、文化のそれぞれの面からこれからのグローバル化が進行

〈持続可能な社会の担い手を育む教育に必要な観点(UNESCO)〉

- ① 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- ② 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」や「つながり」を尊重できる気持ちを育むこと

する社会において、関係性やつながりを意識して取り組んでいくことが重要であることを示している。

これからの社会に求められる人格形成に向けて、安彦は「国境を越えて生きねばならない時代が来たことを、感情的に受け入れるようにするには、“日本人”ではなく“地球人”という感覚・感性の方が気持ちの上で落ち着き、また気分がよい、とする状況を生み出さねばなりません。(中略)グローバルな視野をもつことの必要感とその価値感情が十分満たされる時代になりつつあることを、最大・最高の常識・良識として、メンバー相互に認める社会にならざるをえなくなっていく。これは一種の“教養”ないし“視野”の問題で、教育の“内容”面における“地球的視野”“相互依存”“多様性”を受け容れるよう求めている」⁸と述べ、高木は「他者や事象に積極的に関わり、自分の視野や経験を広げ、自分自身で価値を見出しながら、社会を生き抜くことで、明るい未来を創り上げる」⁹と述べて

⁸ 安彦忠彦「“コンピテンシー・ベース”を超える授業づくりー人格形成を見すえた能力育成をめざしてー」p. 165, 図書文化社, 2014年

⁹ 高木展郎「“これからの時代に求められる資質・能力の育成”とはーアクティブな学びを通してー」p. 175,

いる。二人の考えからは、他者とのつながりを大切にしながら価値判断や意思決定を行っていく学びが、今後一層求められることを示唆していると言える。

以上を踏まえて、「持続可能な社会を創る資質・能力」を次のように設定した¹⁰。

- グローバルな視点で身近な地域で起きている問題に関心を持ち、その解決に向けて身に付けたことを活用しながら主体的に判断したり、今後も責任をもって関わったりしていこうとする力
- 周りの人や社会、自然などとの関係を考え、「関わり」や「つながり」が大切であることを理解し、より良い社会創りを尊重していこうとする力

(2) 「講座『しあわせ社会の実現～働きかけること～』とは

① 平成 29 年度『しあわせ社会の実現～決めること～』の成果と課題

本校では、平成 29 年度に「しあわせ社会の実現～決めること～」を実践した。ねらいの中心にしたことは、社会参加の態度の育成と政治的リテラシーの涵養である(図 1)。講座を進める際、家

族や一般の方、行政機関など、社会を構成する多様な他者と対話したり議論したりする場を意図的に設定していった。生徒を取り巻く社会に生きる人々の多様な生の声(専門家、行政関係者、家族、友達、異年齢の日本人、外国の方など)を直接聞くことで、自分と社会を関連付けながら「しあわせ社会」と向き合うことができるようにしていった。生徒は、自分や身近な地域で起きている問題や課題に対し、主体的に社会

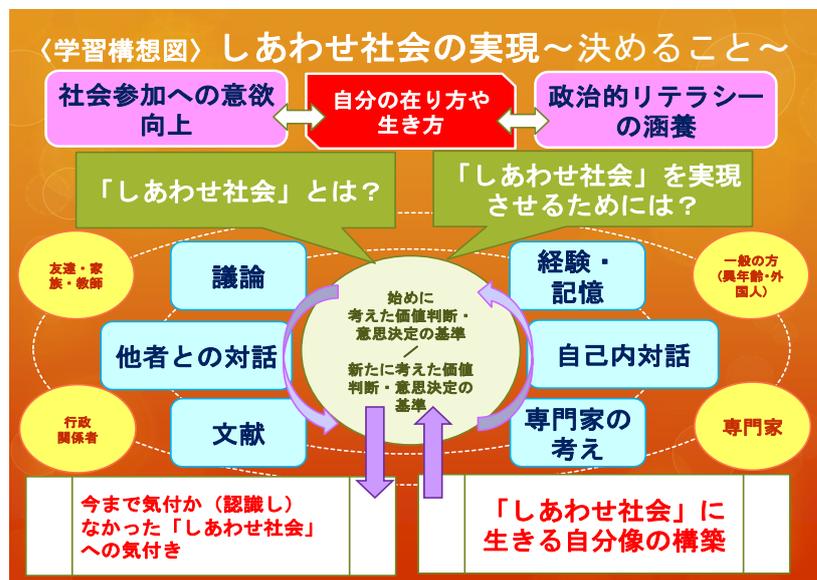


図 1 学習構想図

と関わっていく責任や義務、使命に対する認識を深めながら、そこに生きる自分の在り方や生き方について内省(自己探究・自己更新)し、「しあわせ社会」に生きる自分像を構築していった。

成果としては、誰もがしあわせに生活を送ることができる社会の実現を目指し、様々な他者、情報などに関わりながら方策をまとめることができた。さらには、生徒同士でベストプレゼングループを選出し、その代表生徒は県知事や参議院議員を前にして、熟考した方策や提言を堂々とプレゼンテーションをすることができた。生徒の振り返りからの分析では、少子高齢化などの身近な社会問題に関心を抱き、自分の経験と知識を照らし合わせながら、どのようにそれらの問題と向き合っていくかという、持続可能な社会を創る資質・能力の育成に効果が見られた。

一方、課題としては、対話を通してグループが定義付けた「しあわせ社会」像に対して現状を調査して提言をまとめるところまでは進んだが、働きかけ—実践・行動—までは時数の関係で至らなかった。学びと社会とをつなげ、自分の在り方や生き方について考えを深めることで、生徒は学ぶ意義を実感し、社会に参画・貢献できるように自分を成長させていくと考えた。

② 計画

予定月	時	予定日	探究のプロセス	主な学習内容	備考
6月 ～ 7月	1	6/13 水④	課題設定への意欲付け	○ガイダンスを受け、講座のねらいと見通しをもつ（体育館）。 ○「しあわせ社会」とは何かについて問い直す。	〈担当：滝本〉 全体で体育館 縦割り交流班 G
	2	6/25 月④	情報の収集	○「しあわせ社会」をグループごとに定義する。 ○定義付けた「しあわせ社会」に対し、地域の中で達成できていないことや変わってほしいと思っていることは何か、自分の考えを伝え合う。	〈担当：各担当〉 縦割り交流班の 活動教室
	3	6/29 金④	課題への視点の設定		
	4	7/4 水⑥	課題の設定 情報の収集 整理・分析 まとめ・表現	○インタビュー計画を立てよう。どのような視点で、誰に聞くか。どのように整理・分析してくるか(※夏休み中に調査)。 〈視点／多面的〉 ・産業面 ・インフラ整備 ・子育て支援 ・経済面 ・高齢者福祉 ・原子力発電 ・自然や環境保全 ・職業 〈誰／多角的〉 ・年代ごとに分けて調査 ・地域に関わりのある外国人への調査 〈調査条件の例〉 ・できるだけ多くの人の意見を集めてくる。 ・知人、観光客等、関係は問わないので、地域に関わる外国人の意見も集めてくる。 ・調査したことを整理し、自分なりの方法で分析してくる。(発表できるようにしてくる)	〈担当：各担当〉 夏休みの課題とし、整理・分析するところまでを各自の課題とする。
	5	7/9 月⑤	まとめ・表現	○中間報告会をしよう。 ・グループが設定した「しあわせ社会」とは ・夏休み中の調査計画	〈担当：総合部〉 縦割り中集団を特別に編成
	6	7/23 月②	課題の設定	○中間報告会をもとに、調査計画を練り直そう。	〈担当：各担当〉
9月	7	9/14 金⑥	整理・分析	○ インタビュー結果を班でシェアし、設定した「働きかけ」が妥当かどうか検討する。 ・夏季休業中に実施したインタビューの結果を班で報告し合う。 ・自分たちが想定していた「働きかけ」が実現可能か、効果があるのか、客観的に話し合う。 ・各班で話し合った内容を、教室内で発表する。	〈担当：各担当〉 縦割り交流班の 活動教室

9月 ～ 10月	8	10/4 木⑤	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各グループで「働きかける」ことを最終決定する。 ・前回のシェアリングを元に、グループの全員ができることを決める。 ・どれもじっくりこない場合、内容を修正したり新たに発想したりして、全員で一つの案に絞り込む。 	<担当：各担当> ・実現可能な案を採用するよう、積極的に助言する。
10月 ～ 11月	9	11/15 木⑤	整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 決定した「働きかけ」をいつ、どこで、何のための活動可、どのように行うか、企画書を立案・作成する ・グループ全員で同じ場所、同じ内容に取り組むことを確認する。 ・企画書を作成しながら、「働きかけること」のねらいや目標を再度認識する。 	<担当：各担当> ・外部機関との連携が必要な場合は、前時から詳細を確認しておく。SVCへの依頼は遅くても二週間前に。
12月				<ul style="list-style-type: none"> ○ 各グループで、企画書に基づいて活動する。 	校内行事等との関わりを勘案し、日程は慎重に検討する。
2月	10	2/6 水⑤	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ 働きかけを振り返り、自分たちの変化や社会の変化を客観的に捉え、資料にまとめる。 ・中学生としての視点と、社会からの視点を区別して振り返るようにする。 ・資料作成を分担し、短時間で模造紙に活動をまとめる。 	<担当：各担当>
2月	11	2/25 月⑤	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ 報告会を行う。 ・グループを入れ替え、成果と課題を情報交換する。 	<担当：各担当> 総合部で各班の配置を指定する。
2月	12	2/25 月 集いの 時間	まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○ 振り返りを行う。 ・各教科等の学びを生かしたか、自分たちで社会に働きかけることができるという実感が得られたか、この先も社会に関わろうとする意欲が高まったか、等の視点から、個人で振り返る。 	<担当：各担当> あゆみ用紙に振り返りを記入する。

平成30年度の実施に当たっては、講座の初期段階で2・3年生には平成29年度の学びと比較しながら進めることや、「しあわせ社会」に対する自分の中での視点の変化を実感しながら進めていくことを確認した。また、平成29年度の学びをもとにして、実社会に「働きかけること」を重視し、新しい考えや取組を創り上げていくようにしていくことにした。

計画を進めるにあたっては、平成30年度は生徒が実社会と学校とを往還しながら学びが深まるように取組を工夫・改善していくことにした。その中で、生徒は学びを振り返るとともに、しあわせな社会を創るためにどのように社会に参画・貢献していくべきか、自分の在り方や生き方を内省(自己探究・自己更新)していけるように支援していくことにした。

(3) 「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム」の工夫・改善とは

「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における学習構想について考える。平成 29 年度に「しあわせ社会の実現～決めること～」を構想した際に重視したことは、多様な価値観を有する他者と誰もがしあわせな社会を創るには、どのような価値判断や意思決定を行っていくべきかについて、一人一人が探究していくことにあった。その根底にあったのは、グローバル化社会の進行や外国人の移民や難民受け入れに関わる問題、性的少数者等に関わる人権問題など社会問題を考慮したことはもちろん、本校生徒の実態として、少数ではあるが他者との関係を遮断することがあったり、他者と交流することを拒み特定の間人間関係のもと生活したりする様子が見られ、危惧した背景がある。学年を超えて多様な価値観を有する他者ととともに協同的に学び合うとともに、「共生」について改めて深く考えさせていきたいと構想したことが発端である。

佐藤らは『共生』という言葉は、人間同士のかかわり、人間の生き方、あるいは人間と環境のあるべき姿を示す言葉として用いられている。¹¹とし、「共生」は人間同士の関わりやその中で生活する自分の在り方や生き方、人間を取り巻く環境について考えていくべきとし、三つの視点を示している。また、自分事となった時に共生に向けた行動化が果たせるようになると主張しており、問題解決すべき共生に向けた環境改善などの話題は、生徒の身近にあるものを設定すべきと考えた。平成 30 年度は、昨年度の課題を受けて、生徒の身の回りの社会や実社会¹²との接点を創出し、しあわせ社会の実現に向けて実際に働きかけていくことを重視することにした。

J. デューイは「社会的探究に取り組む人間とは、本質的に“協働探究者”であり、他の探究者とともに問題への関心を共有し、探究過程で対話する能力を培い、相互の意味体系を豊かにするよう協力し合う」¹³とし、多様な他者と協同的に問題解決する学習の有効性について述べている。また、論点整理¹⁴では、これからの時代に求められる人間の在り方として「社会の中で自ら問いを立て、解決方法を探索して計画を実行し、問題を解決に導き新たな価値を創造していくとともに新たな問題の発見・解決につなげていくことのできる人間であること」が掲げられ、実社会との接点を重視しながら身に付けた知識や技能を活用していく学びが、今後一層重視されている。さらに、協同的に学び合う他者の存在について、佐伯は「大切なことは、実際に対話的な交流をもつことができ、内的対話(吟味・評価・批判・反省など)を豊かにし、学びがいのある学びに導いてくれる存在である。」¹⁵と述べている。

以上のことを踏まえ、本講座では、全校生徒で構成した縦割り交流班¹⁶を基本単位として学んでいくことにした。また、学校と実社会とを円滑につなぐため、本校の教育システムの特色である「附中スクールボランティア制度」を活用していくことにし、生徒が実社会に出かけて主体的に学んだり、実社会に生きる人材を学校に招くことで社会を学校に取り込みながら学びを深めていけるように工夫していく。学校内外における人的環境を有効に活用しながら他者に対して自分の考えを根拠とともに明確に説明したり、対話や議論を通じて相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりしていく中で、協同的に持続可能な社会を創る資質・能力を育てていけるようにしていく。

¹¹ 佐藤郡衛、佐藤裕之『共に生きる子ども』を育てる国際理解教育」p. 3, 教育出版, 2006 年

¹² 「社会」の一部に含まれるもののうち、一般的に「世の中」「世間」のように表現されるものを「実社会」とし、「社会」とは分けて考えていくことにした。

¹³ J. デューイ, 阿部齊訳「現代政治の基礎—公衆とその諸問題—」, 岩波書店, 1969 年

¹⁴ 中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会, p. 10, 2015 年 8 月

¹⁵ 佐伯胖『学ぶ』ということの意味」p. 64, 岩波新書, 1995 年

¹⁶ 平成 29 年度は、各学年男 1 女 1 の計 6 名を基本とした交流班を構成し、80 班編成で進めた。

6 実践

(1) 第1時：導入及びガイダンス [全校生徒・体育館]

① ねらい

- 全校で集まることで、講座のねらいや進め方について見通しや意欲をもたせたり、共通理解を図ったりする。
- 今後、活動を共にする縦割り交流班のメンバーや担当教師との顔合わせをする。

② 準備

- 教師：PC，プロジェクター，マイク，ワークシート，配付資料
- 生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

③ 主な展開

主な学習・活動	○：指導上の留意点
1 本時のねらいを知る。 ・アイスブレイク ・本講座の概要を知る。 ・担当教師，メンバーを確認する。	○ 笑顔でコミュニケーションがとれるよう，必要に応じて教師が雰囲気作りを支援する。
2 昨年度の取り組みを振り返る。 担当：(生徒) →60周年記念式典でのスライドを活用 3 国際的な「持続可能な社会」について考える。 ○日本の国際的な評価はどのようにされていると思うか。 ・北欧に比べて低い，先進国の中では高い。 ・日本は，「持続可能な社会」と考えられていない。 ○日本が「持続可能な社会」を創っていくためにはどうすればよいのか。 ・多面的・多角的に課題の解決に取り組む。 ・もっと自分事として社会と関わる。 4 地域で生じている現状を知り，感想を伝え合う。 ○安全面，防災面，経済面，国際面，社会福祉面，健康面，人権面，地域活性化面などの状況を知り，感じることを話し合う。 ・社会を創るためには，様々な人や事に関連させて考え，判断しなくてはいけないんだなあ。 ・あまり感じないけど，地域を守ってくれている人達がいるんだなあ。	○ 教師はコーディネート役であり，一緒に考える役を果たす。本時の後半になるにつれて，多面的・多角的な意見が求められるため，偏った面からの意見を出しているグループには，違った面からのアプローチを仕掛ける。 ○ 生徒の中には能力がたいへん高い子，座学の時間にはなかなか目を輝かせないが，本時のような学習には力を発揮する子がいる(絶対的評価)ことが予想される。462名全ての生徒が意欲をもって取り組む講座のスタートを切ることができるように，教師が巻き込んでいけるようにする。 ○ 地域の課題面だけでなく，解決に向けて地道に努力を重ねてくれている人や事を伝えていくことで，これからの学習に前向きにさせていく。
5 「しあわせ社会」について考える。 ・「私は，「しあわせ社会」とは，○○だと考える。理由は，……………」	○ これまでの活動を通して考えさせ，自分自身の内面としっかり向き合わせる。

<p>6 振り返りをし、次回の期日の確認や次回までに行っておくことの確認をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ グループ長(1), 副グループ長(2)を異性で組織されるように話し合い, 決定する。 ○ 課題「「しあわせ社会」をどのように考えるか, 附属中生以外の人, 3人に聞いてこよう。」 <ul style="list-style-type: none"> ・家族, 親類, 他校生, 道行く人, 外国人, … 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループ長を中心とした組織は, 主に教室での話し合いの中心となる活動を担う。代表者会議を行うこともある。 ○ 本講座は, 不定期で行うため, 講座と講座の時間を有効に活用する課題を可能な限り, 与えていく(社会と向き合う課題, 社会と関わる課題)。 ○ 次回は教室ごとに「しあわせ社会」を定義付けることを確認する。
---	---

④ 会場図(体育館アリーナ)

放送室	ステージ	器具庫
※横は全校ガイダンスの「○□☆☆□○」の並び方		
※(A)グループ内での縦の並び方は担当者任せ(自由可)		PC類
A : 佐藤	G : 奥谷 (村松)	M : 小松崎
B : 井田	H : 船山 (塚田)	N : 木谷
C : 根本 (石川)	I : 菊池	O : 埴
D : 井上	J : 中村 (小林)	P : 近藤
E : 水野	K : 田尻	/
F : 菅谷	L : 開田	

⑤ 生徒の活動と学びの様子

平成 30 年 2 月 1 日(木)に県民文化センターで統合 60 周年記念式典を開催した際, 実行委員の生徒が「しあわせ社会の実現～決めること～」における学びの経緯を発表した。第 1 時は, 実践 1 年目(平成 29 年度)との接続を図るため, その時の発表をもとに喚起することから始めた。平成 29 年度は, 代表グループのプレゼンを聞く機会があったが, 時間の関係もあり全校生徒で取り組んできた様々なグループのプレゼンを聞く時間は設定できなかった。

そのため, 新しい縦割りグループにおいて昨年度の自分たちの取り組みについて紹介したり他のグループの「しあわせ社会」の定義や意図, 学びの様子について共有したりする良い機会となった。1 年生にとっては, 今後の見通しをもてるようになるとともに, 昨年度の成果と課題を共有することができる時間になった。1 年目の実践の成果と課題を互いに共有し, 2 年目を進めていく動機付けを図ることができた。



図 2 授業の様子①

(2) 第2時：「しあわせ社会」定義付け① [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 「しあわせ社会」についてのインタビュー結果を共有し、考え方や価値観を広げる。
- 定義を決めるための議論を通して、合意形成する力を育む。

② 準備

- 教師：ワークシート、配付資料（思考ツール3種類程度）、付箋紙
- 生徒：グローバル市民科ファイル、筆記用具

③ 主な展開

主な学習・活動	○：指導上の留意点
<p>1 夏休みまでの見通しをもち、本時で学ぶ意義を捉える。</p> <p style="text-align: center;"><u>※2時間で各グループの定義を決定する！</u></p>	<p>○ 本時で議論する「しあわせ社会」の定義は、この先の活動で柱となる重要なものであるため、妥協せずじっくり吟味するよう伝える。</p>
<p>2 「しあわせ社会」の定義を決める。</p> <p>(1) 3人へのインタビュー結果を共有する。</p> <p>(2) 各班で定義を話し合う。</p> <p>(3) グループ全体で定義を話し合う。</p> <p>※思考ツールの例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィッシュボーン ・WHYツリー ・マンダラチャート ・イメージマップ ・ブレインストーミング～KJ法 	<p>○ 生徒の主体的な学びが実現できるよう、各班で進行役等の役割を決めておく。</p> <p>○ 下級生も議論に参加し、積極的に発言できるよう、必要に応じて教師はグループの話合いに参加する。</p> <p>○ 論理的に思考しながら議論が進められるよう、思考ツールを準備する。</p> <p>○ 各班で定義が話し合えたら、グループ全体での議論へ移行する。その際の時間配分は担当教師とグループ長で相談して決める。</p>
<p>3 進捗状況を確認する。</p> <p>(1) グループ長を中心に、本時の議論についてまとめ、振り返る。</p> <p>(2) 次時の見通しをもつ。</p>	<p>○ 次時で決定できるよう、各自で必要に応じて情報収集したり考えを整理したりすることが、グループへの貢献になることを理解させる。</p>

先生方へ(確認)

- ・ここで決める「しあわせ社会」の定義は、この先も土台となる重要なものであるため、1時間で決まらなくてよい。すぐに決まってしまうようであれば、様々な視点から吟味・検討できるよう、教師側から揺さぶりをかけながら、深い学びが実現できるようにする。
- ・「班」とは縦割り交流班のこと、「グループ」とは、アルファベットで示す割り当てグループのこと。

④ 生徒の活動と学びの様子

第1時において、できるだけ多くの人に「しあわせ社会とは、どのような社会か」についてインタビューしてくるよう課題を提示しておいた。家族や親戚、身の回りの関わりがある人だけでな

く、電話やメールを含めて実社会の人々などにインタビューしてきたことをもとに、各教室グループにおける定義付けを行った。まとめ方は教室グループの担当者や縦割り交流班の3年生に任せた。一人一人がインタビューしてきたことを付箋紙に記入し、整理・分析しながら進めた。その際、思考ツールを活用しながら進めていくグループが多かった。

2、3年生にとっては、昨年度のグループにおいて定義付けの内容と今年度のインタビューを生かし、より多様な意見をもとに考えを深めていった。3年生を中心にしながら、じっくりと「しあわせ社会」の定義付けに向けて考えを練り上げていった。活動後の振り返りには、インタビューした結果をもとに、自分が「しあわせ社会」の実現に向けてどのようにあるべきかを内省(自己探究・自己更新)している記述も見られた。



図3 授業の様子②

(3) 第3時：「しあわせ社会」定義付け② [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 社会（意見や考え方が異なる他者を含む集団）において合意形成する力を養う。

② 準備

- 教師：A1版の模造紙，付箋紙（必要に応じて）
- 生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

③ 主な展開

主な学習・活動	○：指導上の留意点
1 前時までの内容を確認する。	○ 本時で「しあわせ社会」の定義を決定するため，本時は協力して決定まで到達するように助言する。
2 「しあわせ社会」の定義を決める。 (1) 班での定義を確認する。 (2) 「自分事」として切実感のある定義となっているか振り返る。 (3) 班同士で定義を発表し合う。 (4) グループ全体で話し合い，定義を決定する。	○ 生徒の主体的な学びが実現できるよう，グループ長が話し合いを進行する。 ○ 「自分」も含めた社会であることを確認し，「自分事」として切実感のあるキーワードを出せるよう揺さぶる。そのことが，「働きかけること」を考える際に主体性を伸長させる。 ○ 時間内に定義を決定できるよう，時間配分については，積極的に助言する。
3 進捗状況を確認する。 (1) グループ長を中心に，本時の議論についてまとめ，振り返る。 (2) 次時の見通しをもつ。	○ 時間内に決まらなかったグループは，次回（7/4）までに，集まって決定するよう努める。

先生方へ(確認)

◎グループ長が話し合いを進行し，生徒主体の学びを確保する。教師はサポートとタイムマネジメントに徹しつつ，時間内に生徒たちの力で合意形成した，という達成感を得られるようにする。

④ 生徒の活動と学びの様子

第2時は，縦割り交流班が中心となって「しあわせ社会」についての考えを整理・分類していった。第3時は，各小集団グループの発表を聞き，教室全体で定義付けを行った。前時を含めて，具体的な意見から抽象性のある定義付けを完成させる運びとなった。各教室グループの定義は，次のとおりである。

グローバル市民科の目標に掲げているように，主体的，協同的で問題解決型の学びを実現させるために，生徒主体で進めていけるようにサポートした。また，実社会との接点を重視するために，インタビューに協力してくれた人のことを想起させたり，その思いや願いに応じていく学びを進めていくように助言したりもした。

生徒は，自分一人やインタビューした相手の思いや願いだけではなく，グループメンバーがインタビューした人全員の思いや願いを受けながら定義付けすることができた。

〈各グループの「しあわせ社会」の定義及び理由一覧〉

	定義	理由
A	差別がなく、教育環境が整っている社会	差別がなければ、平等に教育が受けられるから。教育が充実していれば、後の世代へ引き継がれるから。
B	愛がある社会～日常会話から感じられる愛で世界を救おう～	愛があれば、人に優しく接することができ、心を豊かにし合うことができるから。自分の豊かさ（経済面、精神面）を他人のために使うことができるから。
C	すべての人が健康で生きられる社会	健康になると幸せになるのではないかと考えたから。
D	ルールのある中で、個性を最大限に出せる社会	個性があった方が社会が発展し、楽しい生活を送ることができるから。 ルールがないと、秩序が乱れてしまい、混乱を招く。ルールがある中で、一人一人の個性を活かすことができれば、世界はもっと素敵になると考えたから。
E	一人一人の幸せを尊重し、主張できる社会	一人一人の幸せの基準が違うので、それぞれ違う幸せを全員が理解できることが必要と考えたから。
F	安心安全な生活が保障され、互いが尊重される社会	しあわせな生活を送るには、安心と安全が大切であり、尊重されることでお互いが創り出せるから。
G	みんなが安心して笑顔でいられる社会	安全や健康、居場所があり、安心してきて笑顔でいられることがしあわせにつながると考えたから。
H	一人一人が自由で目標をもち、お互いを尊重しながら生活できる	家柄や障がいによって目標を諦めることがないよう、お互いを尊重していく必要があるから。
I	みんなが平等な社会	偏見や出身、体の不自由などの差別で気持ちよく暮らせていない人々がいるということを知り、みんなが助け合って、同じ立場に立ち、全員にチャンスがあれば、みんなが「しあわせ」な社会を目指せると思ったから。
J	全員が同じ制度を平等に受けられ、最低限の必要な生活が送れる社会	どれだけ様々な制度が発展していても、それらの制度を受けられなければ意味をなさないから。また、制度が発展している地域と発展していない地域間での偏りをなくすため。
K	地球を大切に、一人一人が尊重される社会	しあわせ社会を実現するにあたって、今の社会に足りない部分を踏まえながら考えると、地球と人間を両立させること、大切にすることがしあわせ社会への第一歩になると思ったから。
L	本音が言えて、意見が飛び交う社会	現代社会、日本はアクティブに発言しないといけない状況になる。そのため、少しでも自分の意見が言えて、ただ吸収するだけでなく、そういうことが求められているから。
M	気持ちに余裕のある社会	気持ちの余裕とは、お金と絡んでいると思い、気持ちに余裕のある社会の実現のためには「お金」が必要だと考え「お金の大切さ」を伝える働きかけを行いたいと考えたから。
N	愛と信頼で支え合う社会	ボランティア精神を育むことが大切と考えたから。 社会に参画・貢献できる人材の基礎を培うことが大切と考えたから。
O	一人一人が心から笑える	不安をなくすためには、支える人の笑顔が大切だと考えたから。 関わりのある人と思いを分かち合うことが必要だと思ったから。
P	豊かで秩序が保たれている社会	豊かさには、健康や愛などの精神面と、家族やお金などの物質面があり、それらがあることで人は幸せだと感じられるから。 秩序が保たれる→ルールを守るということで、公共や自分のルールの中で生活することで幸せだと考えたから。



図4 授業の様子③

(4) 第4時：「しあわせ社会」活動案の検討 [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 定義した社会を目指して自分たちに何ができるか、有効な働きかけを考案する力を養う。

② 準備

- 教師：ワークシート，定義を記録した用紙（A3）
- 生徒：グローバル市民科ファイル，筆記用具

③ 主な展開

主な学習・活動		○：指導上の留意点，☆：教師の考え方
1 前時までの内容を確認する。 2 「働きかけること」の具体的な行動を決める。 (1) 定義の言葉が示す意味を確認する。 ・必要に応じて言葉の意味を分解したり，違う言葉に置き換えたりして，全員が理解できるようにする。 ※これ以降は，【A】定義が決まり進行がスムーズなグループ，【B】進行が思わしくないグループへ		☆ 定義が未定のグループは，時間を設定した上で，定義を決定するところから始める。 ○ 生徒の主体的な学びが実現できるよう，グループ長が話し合いを進行する。 ○ 生徒が考える「社会」の範囲がバラバラであると予想されるため，交流班の中でその範囲を決定させる。 ☆ 抽象的な言葉を定義にしているグループは，教師が咀嚼しながら「働きかけること」がイメージしやすい段階
【A】 (2) 現状の社会との差異（不足している，改善が必要なところ）はど	【B】 (2) 「しあわせ社会」と現状の社会を比較し，私たちは社会に対して	

<p>こか、調査する項目を話し合う。</p> <p>(3) (2)の仮説を立てつつ私たちは社会に対して何を働きかけられるのか話し合う。</p>	<p>何を働きかけられるのか話し合う。</p>	<p>になるまで吟味し続ける。</p> <p>☆ グループの能力と残り時間を考慮し、【A】か【B】を適切に判断して、グループ長に助言する。</p> <p>※【A】は実態調査をきっちり行い、「働きかけること」の必要性を高める手法。</p>
---	-------------------------	--

先生方へ(確認)

◎グループ長と事前の打ち合わせを行ってください。グループ長は、50分の間、その子なりに戦っているのです、先生方も一緒に考え、サポートし、自己肯定感を育んでいきましょう。

◎その他

ア グループの定義は決定したか

定義が決定しないと、「しあわせ」のイメージの共有、「社会」の範囲、「働きかける」手立ての提案などができません。せっかく生徒たちが妥協せず、語り合おうとしているので、サポートしていきましょう。中間報告会は、きれいにまとまってなくてもよし、として、各班の現状と方向性を分かりやすく説明し、かつ謙虚に他に学ぶ大切さを感じさせてください。

イ 生徒のモチベーションについて

学年を問わず、「なぜこの講座を学ぶのか」という学ぶ意義を感じられていない生徒がいます。エに示すようなゴールが明確でなかったり、自分の役割を自覚できていなかったり、交流班の中に自分の居場所がなかったりすることが原因ではないでしょうか。この講座を学ぶことで身につく力や価値を共有し、調査等において一人一人が必要な存在であることに気付かせ、深く追究する楽しさや社会に参加・貢献できるチャンスは、この附属中だからこそ実現できる、ということを実感させていきたいです。(決して「県知事が来るから」という大人の事情がメインではないのです)

ウ 夏休み中のインタビューについて

今年のインタビューは、昨年度と異なり、「自分たちがやろうとしていることの妥当性や価値を探る」活動と考えました。したがって、「(しあわせ社会 or 今の) 社会をどう思うか」ではなく、「今の社会に対して私たちが働きかける」ことに対して、社会はどう捉えるのか、多角的に判断してもらうことがねらいです。そうになると、両親や近い存在を対象にすると、本人を目の前にする(しかも中学生)ために肯定的な回答が多くなると予想されます。そうではなく、多様な他者と構成する社会に対しても働きかけられる、という意味で、対象者の選択を吟味させてください。

エ この講座のゴール(今年度)について

今年度は、「理想の社会(しあわせ社会)の実現を目指し、現状との差異や課題を見だし、その解決に向けて働きかけることで、自分の貢献度や社会(世間)の反応を実感し、これからの自分の在り方や生き方について考えを深める」ことをゴールにしたいと思っています。その際、多様な他者(ものではなく、人)が構成する社会を対象と限定し、事実として具体的な行動を起こすことで、中学生段階において社会への参画・貢献

し、事実として具体的な行動を起こすことで、中学生段階において社会への参画・貢献する経験を積み重ねることが自分と社会との関わりを生み出し、生徒に「自分も社会に参画・貢献することができた！」という自己有用感と社会の一員であることの実感を蓄積させ、社会を創る意欲と態度の形成につなげたい、と考えました。

④ 生徒の活動と学びの様子

夏季休業前最後の時間となった。平成 30 年度は、「働きかけること」が中心となるテーマとしたが、自分たちが働きかけていこうとする構想と社会が求めているものが適応しているのかを、夏季休業中のインタビューによって検討させていくことにした。

「しあわせ社会の実現」に向けて、中学校段階の子供たちが実際に働きかけていけることは限られているかもしれない。しかし、働きかけることが微小でもできたことや働きかけたことによって周りの人が喜んでくれたという経験を積むことが重要と考えた。また、「～のように働きかけていきたいけれど、今の段階では力が不足している。いつか～を実現させて、社会に貢献したい」と、未来の社会において参画・貢献していこうとする意欲を育むことにもつながると考えて講座の計画を構想した。

授業後に生徒に感想を聞いたところ、生徒は、「自分たちが設定した働きかけることは、(実社会の人々にインタビューするほど)価値あるものなのか」「もし、(そのような構想は)必要でないとかズレていると言われたらどうしよう」と、不安を感じていたようである。実社会に生きる人々に主体的に関わり、協同的に社会を創っていく一歩を歩みだすことができた時間となった。

夏季休業中に一人一人が「自分たちの働きかけの構想は、社会が求めているのか」を実社会に生きる様々な立場の人にインタビューし、9月以降に調査結果を持ち寄ることを確認し、本時を閉じた。



図5 授業の様子④

(5) 第5時：「しあわせ社会」活動案の検討② [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 定義した社会を目指して自分たちに何ができるか、有効な働きかけを考案する力を養う。

② 準備

- 生徒：ワークシート、グローバル市民科ファイル、筆記用具

③ 主な展開

主な学習・活動	○：指導上の留意点
1 本時のゴールを共有する。	○ 時間配分をグループ長と一緒に検討し、生徒主体の活動を展開できるように支援する。
2 「働きかけること」の具体的な行動を決める。 ・これまでの活動を振り返る。 ・社会の範囲を決める。 ・働きかける対象をしぼる。 グループ長が進めやすいよう、一緒に見通しを考えていきましょう。 教師は進め方のフォロー、説明のサポートでしょうか。とにかく3年生が前に出て、沈黙があってもいいから必死で考えていくことを大切にしましょう！	○ 生徒の主体的な学びが実現できるよう、グループ長が話し合いを進行する。 ○ 協同性を育みながら活動を展開できるようにする。 ○ 少しずつ働きかけを具体化できるように支援する。

④ 「働きかける」までのイメージ

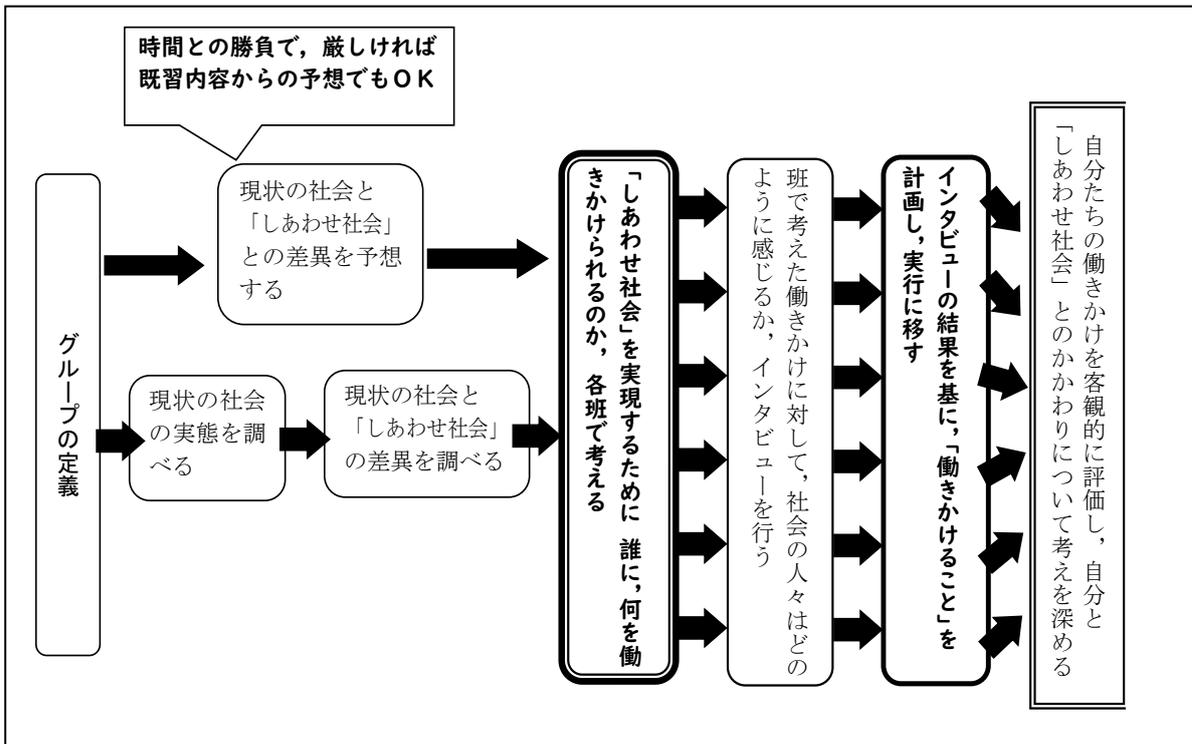


図6 「働きかけること」までの学習構想

先生方へ(連絡)

ア 「働きかけること」について

「しあわせ社会」を実現するためには、「決める」だけでなく「働きかける」ことで、「社会を創る」ことにつながります。ここ2～3時間の生徒の様子を見ると、定義が広義の内容である言葉を選んでいるため、「働きかけること」も漠然としていたり広範囲な社会に対する行動を考えていたりする印象があります。今年度の研究テーマと関連させて考えると、「社会」は範囲の大小や対象者の多少について、かなり許容が認められるものです。「自分事」「切実感」をもたせるためには、対象となる社会の範囲を狭めていくことも手立ての一つかもしれません。

生徒は、「社会を創る(変える)」ために学校外との「社会」と関わる(に働きかける)経験は少ないかもしれません。しかし、学校内の「社会」(学級、学年、はらから等)のために活動したり、地域(住民、行事)と交流する中で結果的に社会によい影響を与えたりしたことは、附属中の生徒ならたくさんあると思っています。そのため、これまで活動・体験したことを振り返らせながら、それらを「しあわせ社会」の定義と関連させ、「中学生のわたしたちでもできること」⇔「働きかけること」と捉えることで、思考が促されるのではないのでしょうか。

どこかへ赴く、提案書をどこかの企業や施設等へ送付する、ちょっとしたボランティアをやってみる。どこまで許容されるかわかりませんが、生徒の柔軟な思考と創造力を大切に、各教科等の学びを総動員しながら現実的な活動を実践し、生徒とともに「しあわせ社会」を創っていききたいものです。

イ 中間報告会について

縦割り交流班の移動なし。その意図は、同じ定義でも、働きかける内容や行動が異なること、その背景には学びのつながり方や広がり方がちがう、ということに気付かせるためです。

他の班から新たな気付きを得た人(班)が内容を随時更新できるよう、報告後の時間を10分以上確保し、学びのつながりを促進させてください。

※1G5班あるところ： 一班あたり5分以内
1G4班あるところ： 一班あたり6分以内
1G2班のところ： 一班あたり10分以内 を目安でどうでしょうか。

⑤ 生徒の活動と学びの様子

「しあわせ社会」について定義付けしたことをもとに、社会(実社会や学校など生徒の身の回りの社会)の現状や課題について生徒の視点から話し合っていた。現状や課題について、現段階でよく分からない場合には、調査したりインタビューしたりするように投げかけていった。

実際に社会で働きかけていくための場の確保についても議論になった。学校外の公共の場で働きかけていくのか、それとも校内において他のグループの生徒を対象に働きかけていくのかなどについても加味しながら検討がなされた。生徒の表情は終始笑顔が多く、自分たちの働きかけによってどのような反応や影響が起きていくのかを楽しみにしているようであった。

平成29年度は、多様な価値観の中で合意形成を図りながら「しあわせ社会」の実現を目指すプ

プロジェクトを計画しスタートしたが、縦割り小集団内での関係性が弱いグループあり、議論が十分に深まりき

らなかつたという課題が残った。今年度は、生徒自身が身の回りの社会についても大切にしてい

くという考えから関係性を重視してきたこともあり、この頃になると学年を問わず、自分の考えを主張したり他者の考えを受容したりと互恵的な関係を築くことができるようになってきた。事前に1時間のねらいや進

め方をグループ長の生徒と確認し、生徒が主体的に判断しながら進めていくことができるように支援していった。



図7 授業の様子⑤

(6) 第6時：「しあわせ社会」中間報告会〔縦割り小グループ・各教室〕

① ねらい

○ 中間報告会における練り合いを通して、適切な課題を設定する力を養う。

先生方へ(連絡)

ア 中間報告会で確認したいこと

- ・教室、班はこれまでと同じ。

※グループOとPは合同にします。活動場所は1-4です。

- ・定義に対して、どのような働きかけができそうか、インタビューはどのような方々に対

して行うのか、今後の見通し等について、現段階の班の状況を報告する。

- ・報告後、インタビュー計画や9月以降の見通しについて、詳細をつめる。

イ 準備物について

- ・ワークシートは用意しません。生徒たちが自主的に進められるよう、45分間の見通しを伝えてあげてください。必要に応じて、書画カメラ等を出してもいいと思います。

② 生徒の活動と学びの様子

夏季休業中にインタビューしてきたことを紹介し合うとともに、具体的な働きかけについて教室グループで議論していった。生徒がインタビューした方は、専門的に第一線で働いている方、身の回りの知り合いの方、公共の場にいらっしゃる不特定多数の方など多岐にわたった。生徒の中には、ゴミ拾いなどの環境づくりについて東京ディズニーランドに問い合わせ、調査してきた生徒もいた。

本時より少しずつ働きかけについて具体的に議論していくことになった。小グループで話し合ったことは、主に「①どのような働きかけを行うのか」「②誰にどんなインタビューをするのか」「③今後の見通し」の三つである。生徒は、実社会で生活する人々の意見をもとにしながら、実際に働きかけていくべき価値ある活動を吟味していった。



図8 授業の様子⑥

(7) 第7時：「しあわせ社会」働きかけ案に対する練り直し① [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 定義した社会を目指して自分たちに何ができるか、有効な働きかけを考案する力を高める。

先生方へ

I これまで活動してきたこと(確認)

ア 「しあわせ社会」の定義を決める。

イ 定義づけた「しあわせ社会」を実現するために、どのような働きかけができるのかを考える。

ウ 考えた働きかけに対して、世の中(社会)の人たちはどう捉えるのか、調査対象を決めてインタビューを行う。

II これからの方向性（総合部員会で検討した末、修正しました）

- エ インタビュー結果を班でシェアし、設定した「働きかけ」が妥当かどうか検討する。
 - オ 各班で検討した内容をグループ内で共有し合う。
 - カ グループの中で「これなら実際に働きかけができそうだ」という案を選定する。もしなければ、グループで一つ基本案を選択し、修正したり発展させたりして、新たな案を生み出す。
 - キ 決定した「働きかけ」をいつ、どこで、どのように行うか、企画書を立案・作成する。
 - ク 企画書に基づいて、社会に働きかける。
 - ケ 働きかけを振り返り、自分たちの変化や社会の変化を客観的に捉え、資料にまとめる。
 - コ 報告会を行い、他のグループの働きかけを共有する。
 - サ 各教科等の学びを生かしたか、自分たちで社会に働きかけることができるという実感が得られたか、この先も社会に関わろうとする意欲が高まったか、等の視点から振り返りを行う。
- ※ 当初は各班で決めた「働きかけ」をそれぞれ実行する、と想定していましたが、時間的な制約、教員の引率その他の分担等を考慮し、現実的ではないと判断しました。したがって、各グループ（アルファベットが同じ、各教室の集団。2～5の班で構成。）で一つの「働きかけ」を決め、日程調整を行い、実践する。

② 生徒の活動と学びの様子

働きかけていくことについては、教室グループで一つにまとめていくように合意形成を図っていった。これまでの自分たちの調査を基にしながら、教室グループメンバーの総意として働きかけていく対象と方策を決定し、企画書にまとめていった。活動時間としては、特別日課期間を有効に活用していくことにした。生徒には、スクールボランティア（以下「SV」と表記）を活用することも可能であることを伝え、案を練っていくように助言した。不



図9 授業の様子⑦

足している部分を保護者や知り合いの方に再インタビューしようという声があがり、自然に実社会とつながりを求めながら進めていく班もあった。

(8) 第8時：「しあわせ社会」働きかけ案に対する練り直し② [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 定義した社会を目指して自分たちに何ができるか、有効な働きかけを考案する力を高める。

先生方へ

今日はどのグループも(第7時に示した)カまで決定したいです。各班やグループで話し合い、「働きかけ」案をグループとして一つ決定してください。

必要に応じて、板書に思考ツールを活用してもいいでしょう。ただし、思考の拡散ではなく、意思決定としての活用です。

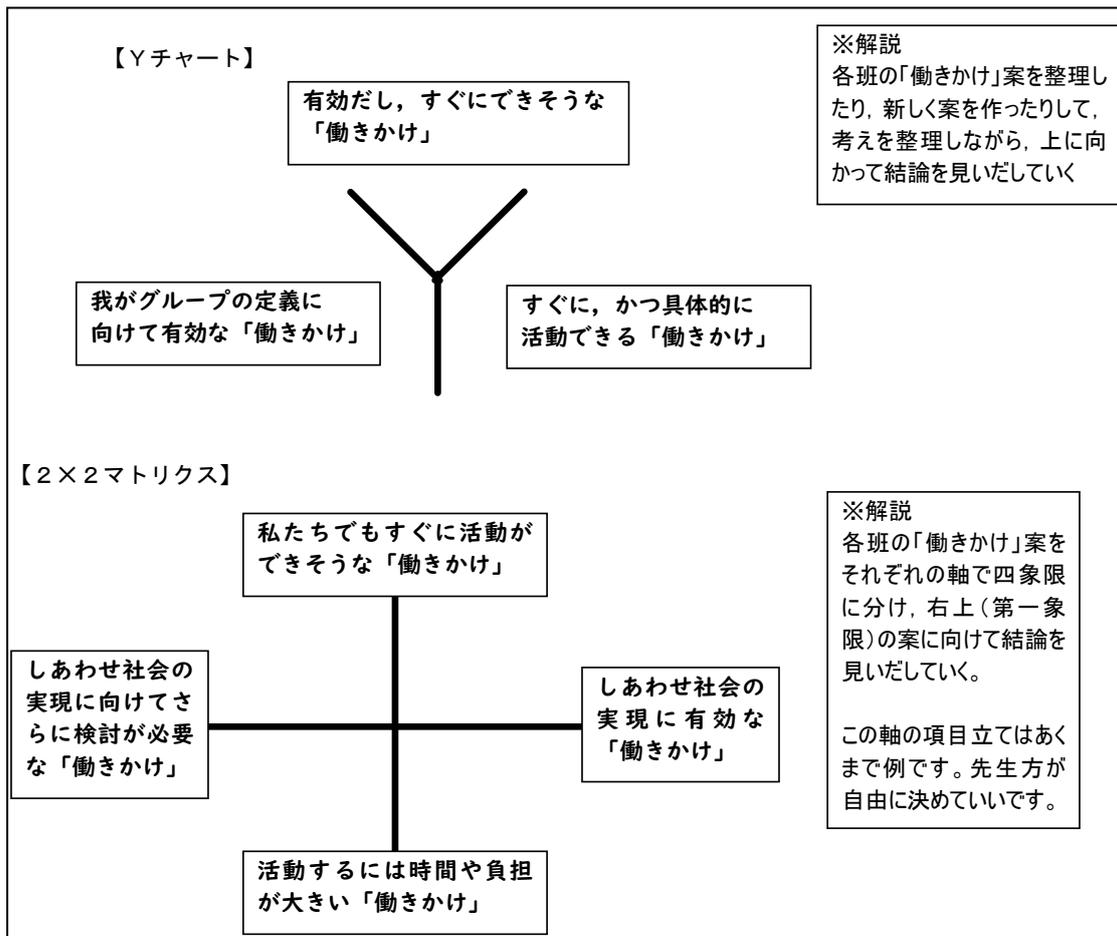


図 10 思考ツール活用例

② 生徒の活動と学びの様子

実社会への働きかけを最終的に決定した。本時を進めるころには、各学年で進めている総合的な学習の時間(グローバル市民科)の学年講座も並行しており、生徒は各講座において身に付けた力も有機的に関連させながら意見を交換していた。グループによって、ホワイトボードを活用しながら意見を出し合ったり、思考ツールを用いて意見を整理したりするなど、生徒が主体的に話し合いを進めるだけでなく、意見の拡散や集約を工夫しながら意思決定するプロセスが見て取れた。これは、3年生がリーダーシップを発揮し、昨年度の全校総合「しあわせ社会の実現～決めること～」において培った力を活用した成果と捉えられるような姿であった。



図 11 授業の様子⑧

(9) 第9時：「しあわせ社会」企画書の立案・作成 [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 定義した社会を目指して自分たちに何ができるか、有効な働きかけを考案する力を高める。

先生方へ

どのグループも企画書を提出していただきます。

ア 企画書の作成

イ 11/15に企画書を完成し、2018年中に「働きかけ」を遂行します。企画書が完成しない場合、各グループで時間を作って完成させ、必ず「働きかけ」を行いましょう。

ウ 企画書に最低限必要な項目は、「いつ」「誰が」「どこで」「誰（何）を相手に」「何をやるのか」「なぜそれをやるのか」等を想定しています。

先生方が引率指導を行うと想定し、各自必要な項目を追加・修正してください。

エ 「働きかけ」をグループ全員同じ内容で行うとしても、グループ内で分担するとしても、全生徒が必ず社会に「働きかけ」するような活動になるよう、ご指導ください。

オ 外部機関やSVCを活用する場合、各グループで連絡調整をお願いいたします。時間的に余裕がないため、無理な計画はお勧めしません。また、管理職判断が必要な場合もあると思うので、報告・連絡・相談を行いましょう。

② 生徒の活動と学びの様子

「働きかけること」について、内容や日程などの詳細を話し合い、企画書(図 13)を作成した。多くの生徒は、日程調整やアポイントの取り方など、具体的に考えることで初めて気が付くことが多く、「こんなに大変になるなんて・・・。」「もっと軽く考えていた。」などと漏らす生徒もいた。校外に働きかけるグループは、日程等で学校行事を考慮しなければならないため、働きかけることすら変更を検討したほうがよいか、教師とともに真剣に悩み、考える場面が見られた。この後、計画に沿って働きかけが行われた。各グループの働きかけは多様であり、一斉に実施することは難しかった



図 12 授業の様子⑨

ためにSVを活用しながら、課外活動の時間を有効に活用して行った。

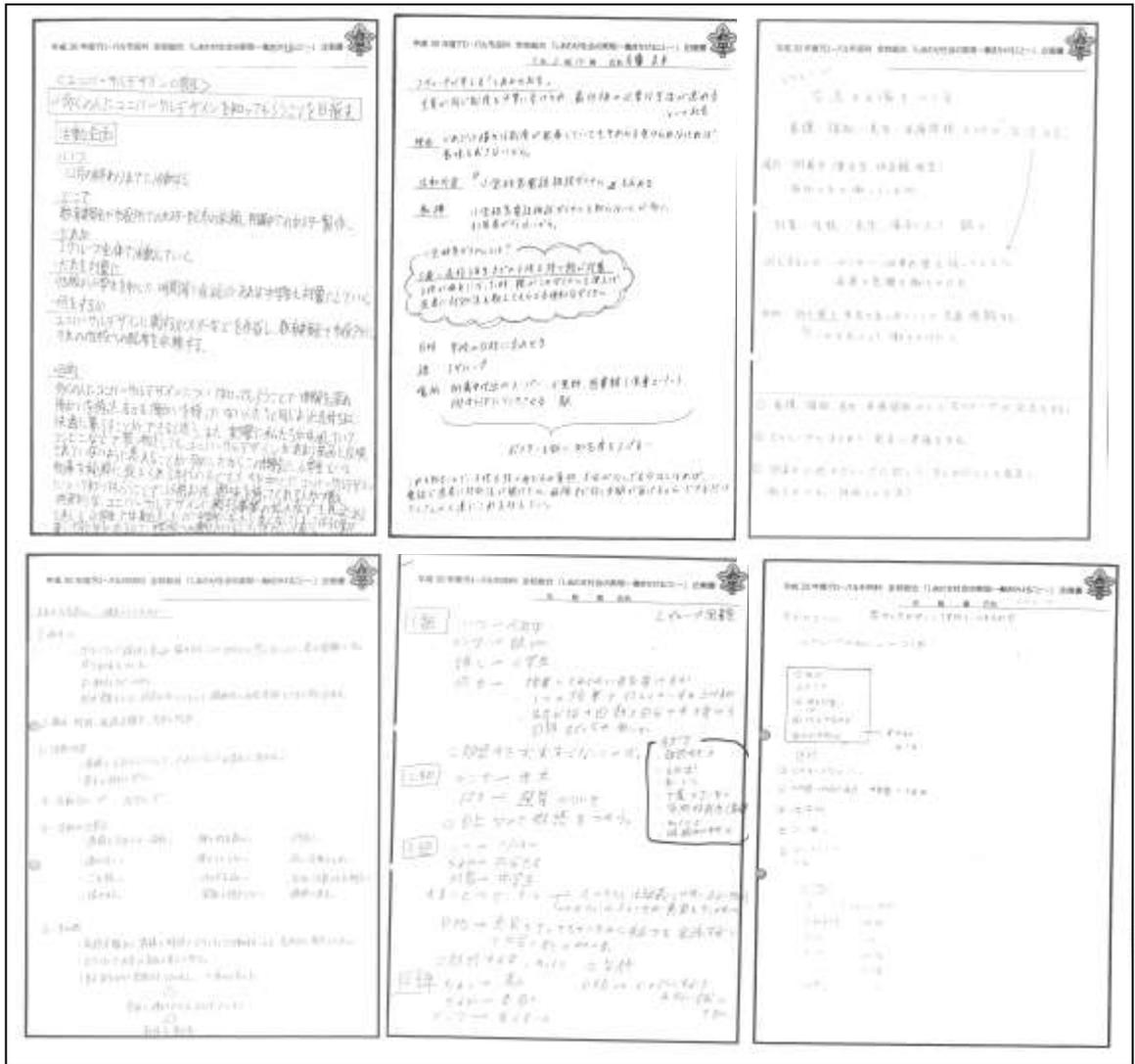


図 13 企画書

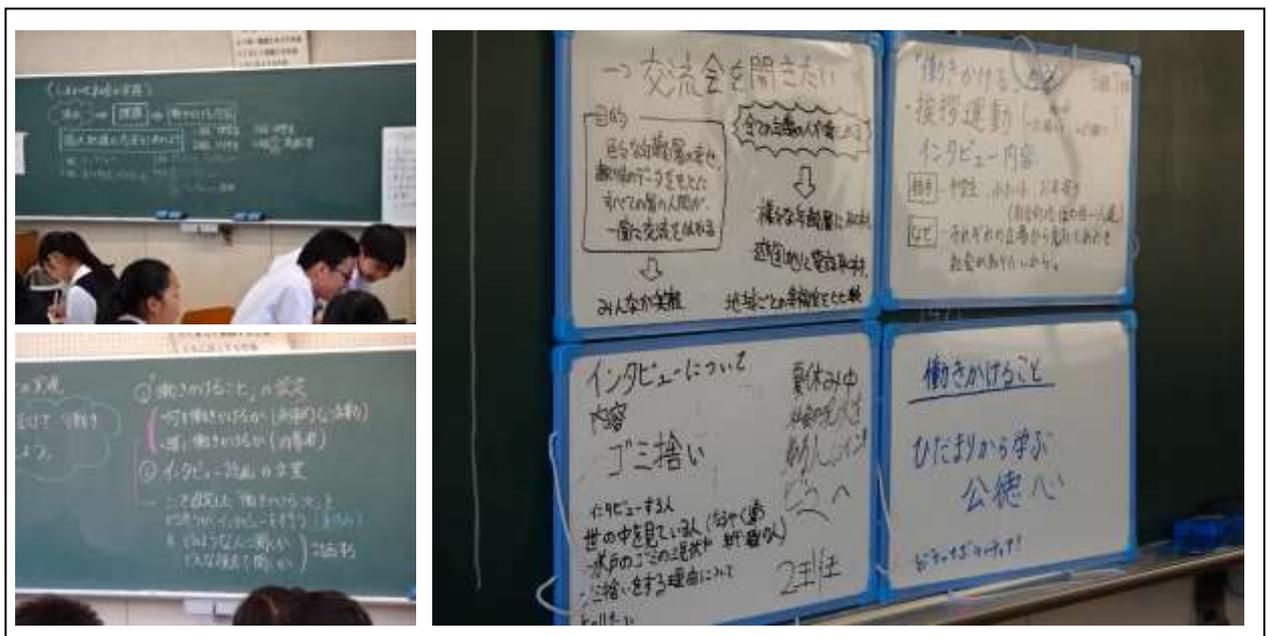


図 14 授業の様子⑩

(10) 第 10 時：働きかけの振り返り，報告会用資料の作成 [縦割り小グループ・各教室]

① ねらい

- 自分たちが働きかけたことの有効性を検証する力を養う。

先生方へ

これまでの活動を模造紙にまとめ，発表会の準備をお願いします。

ア 配付物の確認：模造紙 1 枚，画用紙（班で 5 枚程度），両面テープ 1 個

イ 働きかけたことをグループ内で共有・整理する。

→ 場合によっては，班だけで共有・整理すればよい。

ウ レイアウトの決定

エ 役割分担

オ 発表の担当確認

※ 配慮事項

ウ：見やすさを意識しましょう。自分の意見をまとめる言語能力や，文字の色や大きさ，配置など美術のデザインに関する能力など，身に付けた技能を活かしましょう。

エ：班員全員に役割が与えられるよう，分担を割り振りましょう。1・2年生はテスト同時実施日，3年生は学力検査がある時期ですが，大切なのは計画とバランスです。誰が，何を，いつまでにやればいいのか，明確になっていれば，負担は少なくなります。この時間内に，必ず決めておきましょう。

オ：報告会は 2 / 25（月）です。それまでに集まる（昼休み等）機会を作るのはなかなかできないので，2 / 6 におおよその流れを決めておき，あとは個人の努力に委ねることが必要かもしれません。

② 生徒の活動と学びの様子

私立入試等の関係で，各グループの働きかけた期間からやや間が空いてしまったため，本時の活動は，生徒同士の情報共有から始まった。各班に模造紙 1 枚，画用紙 5 枚程度を配付し，それぞれのグループが設定した「しあわせ社会」の定義や，「しあわせ社会」を実現するための働きかけに関する報告会の資料をまとめた。

模造紙の構成は，学年関係なく意見が交わされ，役割分担はスムーズに決定することができた。また，3年生になるべく負担をかけないようにと，1・2年生が積極的に分担を請け負う姿もあった。これまでの時間によって，異学年の交流班として集まった生徒たちが共同体として機能するまで成長した結果と言える。



図 15 授業の様子①

(11) 第 11 時 : 報告会 [縦割り小グループ/合同・各指定教室]

① ねらい

- 自分たちが働きかけたことの成果と課題を他者に伝える力を高める。

先生方へ

ア 担当教室について ※ ○数字は縦割り交流班のこと

教室	集まる班	教室	集まる班
1-1	1組①, 4組④, 2組⑦, 3組⑩, 1組⑬	2-3	3組②, 2組⑤, 1組⑧, 4組⑪, 3組⑭, 2組⑰
1-2	2組①, 3組④, 4組⑦, 1組⑩, 2組⑬	2-4	4組②, 1組⑤, 3組⑧, 2組⑪, 4組⑭, 1組⑰
1-3	3組①, 2組④, 1組⑦, 4組⑩, 3組⑬	3-1	1組③, 4組⑥, 2組⑨, 3組⑫, 1組⑮, 4組⑯
1-4	4組①, 1組④, 3組⑦, 2組⑩, 4組⑬, 4組⑰	3-2	2組③, 3組⑥, 4組⑨, 1組⑫, 2組⑮, 3組⑯
2-1	1組②, 4組⑤, 2組⑧, 3組⑪, 1組⑭	3-3	3組③, 2組⑥, 1組⑨, 4組⑫, 3組⑮, 2組⑯
2-2	2組②, 3組⑤, 4組⑧, 1組⑪, 2組⑭, 3組⑰	3-4	4組③, 1組⑥, 3組⑨, 2組⑫, 4組⑮, 1組⑯

- ※ 一つの教室に 6 班ある・・・1 班あたり報告 5 分, 質問 1 分
一つの教室に 5 班ある・・・1 班あたり報告 5 分, 質問 2 分
プラス スクールボランティアの方から感想をいただく

イ タイムテーブルについて

13:20	移動完了, 準備 ※代表者はお迎え
13:30 ~ 14:20	報告会
14:25 ~ 14:40	清掃
14:45 ~ 15:15	振り返り (あゆみ用紙)
15:20 ~ 15:30	自学の時間
15:30 ~	HR
16:00	下校完了

ウ お願い

- ・25日の13:20には, スクールボランティアの方を各教室へご案内していただきます。各教室の代表者1名は, 13:20に多目的室へお迎えに来てください。報告会の準備と会場セッティングは, 残りのメンバーでお願いします。
- ・上記のタイムテーブルを見ながら, 3年生を中心として進行をお願いいたします。先生たちはほとんど口を開きません。講座のまとめも, 最後に一言3年生からお願いいたします。

② 生徒の活動と学びの様子

グループが異なるよう設定した教室において、作成した資料を使って報告会を実施した。発表においては、担当した内容を報告するようになっており、すべての生徒が報告を行った。また、ワークシートは用意せず「聴くこと」に専念することにした。

生徒は、自分が作成した資料を説明するため、どの教室においても堂々と報告することができていた。また、3年生にもなると、一方的に話すのではなく、質問を投げかけたり意見を求めたりするなど、双方向的な発表を行っていた。これは、総合的な学習の時間だけでなく、各教科等の活動で養われた表現力の成果と捉えた。

また、スクールボランティアを募集し、約30名の方々が各教室で一緒に報告会に参加し、生徒の発表に対して質問や感想を述べていただいた。生徒だけの自己評価に留まらず、社会の一員として学校外の視点から意見をいただいたことで、生徒は納得した表情で聴き入ったり、自分たちの活動を認めてもらえたことで自信がついたりしたため、価値のある報告会になった。



図 16 事前打ち合わせの様子



図 17 授業の様子⑫

(12) 第12時：報告会〔個人／自教室〕

① ねらい

- 働きかけたことの成果と課題や自分自身の変容を振り返る。
- 「しあわせ社会」の実現に向けた自分の在り方や生き方について考える。

② 生徒の活動と学びの様子

これまでの活動を振り返り、その内容の成果や課題、これからの自分自身の在り方や生き方について考え、ワークシートに記入した。

記述内容からは、自分たちの働きかけを客観的に捉え、活動から得られた感情や新しい発見などを肯定的に受け取る生徒や、自分たちの活動に成就感を得ている生徒が多く見られた。一方、「もっとたくさんの人に働きかけなければならないと感じた」などと、やりがいを感じつつも、もっとできたという向上心で自分たちの活動を課題としている生徒や、日程等の問題から働きかけまでたどり着けないことで、実際の社会では物事を計画通り進めることの難しさを学んだ、という記述も見られた。

7 検証

(1) 検証材料と検証方法

講座「しあわせ社会の実現～働きかけること～」(H30.6～H31.2実施)における、振り返り用紙(A:「働きかけの成果と課題」、B:「自分自身の変化」、C:「『しあわせ社会』の実現に向けた自分の在り方や生き方」の三つの記述部分)を検証材料とする。(※分析対象生徒の一部を抜粋)

下線部の分析内訳

- _____ : 自分の在り方や生き方への気付きや考えを深めている(内省に関わる)記述部分
- : 周りの人や社会との「関わり」や「つながり」について考えている記述部分
- _____ : 社会に参画・貢献しようとする意欲につながっている記述部分

(2) 生徒の記述と分析

① 生徒(1年生)C

しあわせ社会はこれだ！と一つにしぼることができないから今回授業としてしあわせ社会について考えると、しあわせ社会を作るのは難しくても、作るために私たちにやれることはかなり身近にあって、発表のときに聞いた、そもそもの社会は自分の中や教室にもあてはまる。だからまずは、自分の中の社会をしあわせにして、それを教室に広められるように、身近なものからしあわせ社会をつくっていけるようにしたい。

② 生徒(1年生)B

自分たちの「当たり前」と目の不自由な方々の「当たり前」のちがいを比べることで、すべての人が“しあわせ”になるには、自分たちの生活を見直すことが必要だと感じた。しかし、そのことをたくさんの人に伝え、実行できなかったことが課題となった。これらのことから、一つの方向で物事を見ていた自分が、いくつもの方向から物事を見ることができ、他人に気遣いができるようになった。

③ 生徒（1年生）A

私は（小児救急相談ダイヤルの）制度についてあまり興味はなく、調べることも一切なかったけれど、しあわせ社会について働きかけることで、茨城県、水戸市の様々な制度について触れることができてよかったです。また、ポスターを貼り、働きかけることで、県庁からお礼をいただいたため、とてもうれしく思いました。

④ 生徒（1年生）C

正直、アンケートを取る前、働きかける前は「本当にできるかな」など、少々不安もありました。しかし、働きかけを進めていくうちに、不安という気持ちがなくなりました。そのため、今回のテーマ「働きかけること」は僕にとって大きな進歩につながったと思います。

⑤ 生徒（2年生）B

予定していた活動の内容や意図を明確にして盲学校の方に提案させていただいたところ、在ったことがない人と目が見えにくい、もしくは見えない我々の生徒を交流させて、盲学校の生徒たちがどのような感情になるのか考えて欲しいとの意見をいただきました。このことから、自分も他人のことをよく見てこの行動をとったら相手がどのような気持ちを抱くのか、それらをよく見極めることが大事だと思いました。

⑥ 生徒（2年生）C

今回Lグループでは、学校内のみでの小規模な働きかけであったと思った。しかし、私たちのグループの定義をもっと大規模に広める必要があると思う。僕は、それに先駆けて、（これから）意見をたくさん言いたいと思う。

⑦ 生徒（2年生）B

（前略）調査を進める上で、町ゆく人々にインタビューを行ったり、アンケートをとったりしたことがあった。自分たちの考えにはなかった視点からの意見をいただけ、しあわせ社会の実現には、第三者の人々の意見を聞いてみる必要があると考えられた。

⑧ 生徒（2年生）A・B・C

しあわせ社会の中で一番大切だと思うことは、自分たちで考えたことを実現できるかどうかだと思った。昨年は、大きな課題（ゆとり教育はどう思うか）を挙げて活動し、大人の年代に話を聞いて考えをまとめて終わってしまったが、今年は実際に活動したことで、ゴミを拾う人の気持ちになることができた。このことから、しあわせ社会を実現するためには、様々な立場に立って、どちらの立場でも納得するような答えが大切だと思った。

⑨ 生徒（3年生）A

（前略）私は、講演を聞くまでは人との関わりを多くしない方が余計なトラブルが減るため良いと考えていたが、定義にもあるように、他者の幸せを認め、自分の意見も主張しなければいけないという考えに至った。

⑩ 生徒（3年生）C

あいさつを朝にしてみて、自分から声をかけることの大切さが身にしみました。知らない人も知っている人も、自分からいかないと返してくれないので、自分からいき、あいさつをしました。朝あいさつをしていると、朝から元気な人や疲れている人など、色々な人を見ました。自分のことだけでなく、周りを見ようとも思いました。

⑪ 生徒（3年生）A・C

（前略）アンケートをとった結果、自分の悩みを相談するのは恥ずかしいと思い、スクールカウンセラーやエドスタッフに相談するのをためらっている人が多い、と分かった。ぼくたちは、附属中全体として、「自分の悩みを打ち明けることは恥ずかしいことではない」という意識改革をする必要があると考え、ポスターを作った。全員が気持ちよく通える学校を作っていきたい。

今年度は社会に「働きかける」ことを重視して取り組み、実際に活動したことで、その成果と課題を具体的に記述する生徒がほとんどだった。③、④、⑧の生徒の記述からは、「働きかけること」で達成感や自己有用感が得られたことを読み取ることができ、定義の設定から働きかけまで主体的に活動してきた成果が生徒自身に深い学びとして残っていると捉えた。

一方で、⑤、⑩の生徒の記述からは、実際に働きかけることで現実を目の当たりにし、思い描いていた理想論とのギャップを受け止めていることもうかがえる。二人は、そのことを課題として捉え、これからの自分の在り方や生き方とつなげたり、社会へのアプローチの在り方を再考したりしており、肯定的に振り返ることができていると捉えた。しかし、中には「やりたいことができなかった」などと、もっと働きかけたかったことを記述している生徒もいた。振り返りの場面においても、ただ生徒に書かせるだけでなく、学校としてのフォローや手立てを充実させることが課題として残った。

このような実態はあるにせよ、多くの生徒は社会に対して働きかけることで、自分たちの設定した定義に照らし合わせて成果と課題を客観的に評価し、これからも社会に参画・貢献しようとする態度が形成されている傾向があることが明らかになった。また、働きかけを通して自分と社会のつながりを実感することで、新しい発見やこれまでになかった価値観との出会いを経験することができた生徒が多かった。⑥や⑨の生徒を筆頭に「これからの自分はどうすべきか」「何が必要か」などと、自分の在り方や生き方を更新していく（内省する）記述が目立った。その要因として、2・3年生にあたっては、平成29年度に実践した「しあわせ社会の実現～決めること～」と今年度の実践を比較することができるため、昨年度よりも各教科等における知識や技能が身に付き、講座の中で活用できたこと、見方・考え方を働かせながら学びと向き合うことで深く学ぶことができたこと、意思決定のプロセスに見通しがもてることで主体的に講座の学びに臨めたこと、働きかけたことで学びに具体性が付随し、生徒が学びの価値や効果を実感しやすかったことなどが考えられる。

8 研究のまとめ

持続可能な社会を創る資質・能力を培うために、全校生徒・全職員で取り組む総合的な学習の時間（グローバル市民科）「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムを工夫・改善したところ、次のような成果と課題が明らかになった。このプログラムに関わった全ての人の感想や意見を踏まえて整理する。

(1) 成果

- 講座担当がガイダンスを充実させ、学びの見通しや講座の全体像に対する問いを抱かせることができたことにより、生徒の興味・関心を高めることができていた。今年度は、平成 29 年度の「しあわせ社会の実現～決めること～」における学びの成果を生徒それぞれが発表し共有し合ったり、新たに学びに加わる 1 年生に伝えたりすることから始まったのが、意識を高める上でも効果的だった。
- 「しあわせ社会」を定義付けるため、哲学的に抽象的な概念を構築し、少しずつ具体化を図っていく一連の活動は、たいへん意義深い本校ならではの学びとなっている。縦割り交流班を活用し、全校生徒で取り組んでいることも多様性を重視した学び合いの視点から、今後も研究と実践を継続していくべきである。
- 「しあわせ社会」を定義付けるためや、自分たちが働きかけようとしていることが実社会において妥当性のあるものかを検討するためなど、生徒が学校の外に出てインタビューしなければならない機会を積極的に設けることにより、多様な社会と生徒との接点を生み出しながら学びを深めることができたのは、社会に参画したり貢献したりしていこうとする資質・能力を培う上で有効だった。
- スクールボランティアコーディネーターの協力もいただきながら、スクールボランティアを積極的に活用し、一般企業や市役所、大学など多様な社会を巻き込みながら学びを深めることができた。
- 働きかけをする時間はグループによって異なるため、今年度のように課外活動の時間を活用できたことは良かった。その際、スクールボランティアを積極的に活用し、教員の負担を減らすことができたことも良かった。
- 生徒が定義した「しあわせ社会」のもと、様々な社会へ働きかけることで学びの成果が具体化され、社会へ参画・貢献しようとする態度が形成されている傾向が見られたり、自分の在り方や生き方を考える(内省する)力が高まった生徒が多く見られたりした。

(2) 課題

- 実社会に生きる外部人材を積極的に活用し、対話する場をもっと多く設けることで、共に学びを創り上げる講座にしていくのが理想である。
- 本講座は年間を通して不定期で活動するため、生徒の中には学びのつながりが途切れてしまった可能性もある。教師・生徒ともに見通しをもち、学ぶ意義を認識させながら進めていく工夫が必要である。
- 生徒が実社会に赴くことは何度もあったが、深く関わり続ける人的な交流が図れないか。学校近隣の身近な地域との交流の機会をもっと大々的に設定できると、生徒や学校とのつながりが学び以外の面でも深まるのではないか。
- 生徒が主体的な態度で社会に働きかけることができて良かったが、グループによって「働きかける」質の差が大きかったのではないか。生徒の主体性は重視しながらも、担当教員のコーディネートやサポート場面を見極めて必要に応じて指導をしていくと良い。
- 「まずやってみる」という今年度の実情から、「実態調査に基づき、理論立てて働きかけを検討し、必ず実行に移す」という学習プロセスで取り組みたい。また、11 月までに報告会が終われるような計画を立て、早い段階で教師・生徒と共有したい。

〈引用文献〉

- 安彦忠彦「“コンピテンシー・ベース”を超える授業づくりー人格形成を見すえた能力育成をめざしてー」p.165, 図書文化社, 2014年
- 高木展郎「“これからの時代に求められる資質・能力の育成”とはーアクティブな学びを通してー」p.175, 東洋館, 2016年
- 茨城大学教育学部附属中学校「研究紀要〈第46集〉平成29年度」p.118
- 佐藤郡衛, 佐藤裕之「『共に生きる子ども』を育てる国際理解教育」p.3, 教育出版, 2006年
- J. デューイ, 阿部齊訳「現代政治の基礎ー公衆とその諸問題ー」, 岩波書店, 1969年
- 中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会, p.10, 2015年8月
- 佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」p.64, 岩波新書, 1995年